２０２０年7月３１日（金）

老球の細道５５５号

7月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

コロナは収束と思いきや再び増加の現在進行中。それにたたみかけて毎日のように大雨被害が続く。黛ジュンが歌った「真赤な太陽♬」いったいどうなってしまったのか。あいかわらず季節感がなく今月も終わってしまった。

１・テレビから

◆「やりたいこと　やったもん勝ち　青春なら♬」〈NHK：忍たま乱太郎「勇気１００％♬」〉：

NHKのアニメソングの一節であるが、孫たちが幼稚園のダンスで習ってきて、毎日のようにこの歌詞を聞かされた。聞いているうちに「そうだよな」と納得。バスケットの授業で遠慮してシュートしない学生に、この歌詞でアドバイス。一生青春の爺も自戒。

２・読書から

◆「自由な人は、何よりも死について考えることが少ない。彼の知恵は、死についての省察ではなく　生についての省察である」〈工藤喜作著『人類の知的遺産・スピノザ』（講談社）〉：

「死を想え」は一日一日を真剣に過ごし充実させるためのキーワード。毎日、体温、血圧、コロナの感染者数などの数値ばかりに一喜一憂する私は、自由に生きているとは言えない。

◆「ラムゼイは、試合は一篇の詩であると考える人物であった。試合の中に美と真実がある。それは、あたかも、美しい肉体が、訓練の厳しさと練習の過酷さを感じさせない流麗な動きのなかで、芸術の極致を演じるバレエのようなものであった。バスケットボールとは、スコアボードつきのバレエなのだ」〈ハルバースタム『勝負の分かれ目・上』（サイマル出版会〉：

ジャック・ラムゼイはNBA伝説の名コーチ。彼のチームはひと目でわかる特徴があった。全力を投入する、選手は体調を整えている、対戦相手より常に洗練されている、規律が正しく、いつでも試合に臨める態勢を整えていたという。チームはコーチで変わる。

◆「これから１年間のシーズンは長い。勝ったり負けたりの繰り返しだけど、それでも５割だから。でも、勝ったり負けたり、勝ったり勝ったりになったら・・・。だから勝ったり勝ったりになるようがんばろう。負けたり負けたりになったら、次勝とう」〈スポーツ・ジャパン：プロ野球・仰木監督〉：指揮官のおおらかな一言が選手、チームのモチベーションに大きく影響する。その時その時の結果に一喜一憂せず、長い目で見ながらの台詞が必要。

３・新聞から

◆「情熱のある最も朴訥な人が、情熱のない最も雄弁な人よりもよく相手を承服させる」〈朝日：折々の言葉：ラ・ロシュフコー〉： 仕事を任せられる人材を選ぶときに最も重視する資質は二つ。情熱と勤勉（努力）。「まず燃えよ！燃えない焚火を誰が囲もうか」。

◆「魚、水を失わば死す。水、魚を失うも猶水たり」〈朝日：日曜に想う〉：中国の古典にある言葉を、君主を魚に、民衆を水にたとえる。民衆とは支配されつつ支配者の死命を握る。選手とコーチの関係も同じである。